

第百二十二話 我が将兵の敢闘、此処にあり（５）後続くものを信ず「若林大尉」

1943(S18)年9月21日夜放送されたラジオ番組『若き血に祈る』で陸軍省兵務課長によって、その壮絶な最期が紹介された若林東一大尉を紹介して、極限状況下における第一線指揮官の姿を見てみたい。

1 若林中尉(戦死後大尉昇進)の経歴等

若林中尉は山梨県南部町出身で、昭和8年1月に甲府の第1師団歩兵第49連隊に入営、伍長、軍曹と昇進した後、S11年4月に陸軍予科士官学校に入校、13年4月に士官学校本科に進み、14年9月に52期で卒業、11月少尉任官という兵上がりの将校という異色の経歴の持ち主である。若林大尉は、支那大陸の作戦に参加した後、第38師団228連隊第10中隊長として、九龍半島香港攻略作戦及びガ島作戦に参加した。



2 九龍半島攻略作戦における偉功（1941(S16)年12/8～12/25）

九龍半島には「ジン・ドリンカーズ・ライン」と呼ばれる堅固なトーチカ陣地があり、攻略には数週間かかると見積もられていた。連隊長に夜襲を命ぜられた大隊の若林中隊長は二五五高地を奪取し、更に三四一高地をも奪取した。これに乗じた師団は、攻撃を開始し、主防衛線である三六六高地と二五六高地を占領した。たまたま、英軍は香港島へ撤退した。23軍司令部では、土井連隊長の独断専行について軍法会議に付すべきとの声もあがったが、「若林中尉が、前線を偵察中に偶然敵兵力配備の欠陥と警戒の虚を発見し、挺進敵陣地に突入しこれを奪取した」とすることで収拾が図られ、中尉には感状が授与された。「斥候中の挺進奪取」という話が流布した。何とも日本的な問題解決法ではあるが、若林中尉が機敏且つ優れた統率で連隊の鋭鋒として活躍したことは間違いない。この戦闘での英軍捕虜（大尉）は、まず退避させており、同英軍捕虜は「この将校は立派な紳士だ。情け深く礼儀正しい。こんな優れた将校は英国軍隊でも珍しい」と語ったという。

3 ガ島における壮絶な最期（1941年1月14日）

前年11月、ガ島奪回の為同島に派遣された228連隊/38師団の若林中隊長は、見晴山死守を命ぜられたが、奮戦するも衆寡敵せず、遂に1月14日戦死した。

冒頭述べたラジオ放送内容を紹介する。同放送では、「私は今ここに彼のガダルカナルに日本男子の忠魂を留めて護国の神となられた若林中尉の雄々しくも崇高な言葉を諸君とともに振り返ってみたいとおもう」として、ガダルカナルにおける若林中隊長の凄絶な行動を紹介した。『両手両足を敵弾に奪われた若林中隊長は、当番兵に背負われて大隊長のもとに報告に行った時、大隊長は後ろに下がって傷を治療するように優しく言った。その時、若林中隊長はにっこりと笑って答えたのである。《大隊長殿、言葉を返して済みませんが、私は生きながら得て偉くなろうなどという考へは毛頭ありません。私の持っている一切を天皇陛下に捧げ奉ろうとして私は戦っているのです。私は神国日本の天壤無窮を信じます。私は大東亜戦争の必勝を信じます。私は後続くものを信じます。香港以来私を中心として戦い抜いた中隊長の兵と一緒に死ぬのが私の唯一の願望であります》そしてまた当番兵に背負われて最前線の陣地に帰り、その愛する部下とともに大義に殉じたのである』。

4 見晴山塹壕に中尉の信念3つ書いてあるうちのひとつ「私は後続くものを信ず」と

5 同中尉の日記は涙なくして読めない。

* 国家の戦争指導には多々問題あるも、第一線部隊指揮官が極限状況下において素晴らしい統率を行ったことは特筆すべきだ。正に『中隊長』は家族・一心同体なのである。それを体現したのは一人若林大尉のみではなく殆どの指揮官がそうだったと確信する。

（第百二十二話 了）